

坂井建雄(監修)

町田志樹(著)

PT・OT ビジュアルテキスト専門基礎 解剖学

評者 工藤慎太郎

森ノ宮医療大学保健医療学部

理学療法学科に入学して最初に出会う関門は、解剖学、生理学に基づく運動の解釈であろう。この関門をしっかりと実力でぐり抜けたセラピストと、何とか？ぐり抜けてきたセラピストは、臨床で病態の解釈という大きな壁に挑む。しかし、この壁は学生時代のテストや国家試験のように解答を覚えたり、参考書をみたら常に解答が明示されているわけではない。臨床で病態を解釈して、闘うためには、解剖学や生理学の知識が不足していることに気づく。

著者は日本全国を飛び回りセラピストのための解剖学の再教育にモチベーションをもっている根っからの教育者である。セラピストになって解剖学研究に身を置くと、どうしても研究や臨床が楽しくなる。患者を救う方法を伝えたいが、学生時代に教わった内容くらいは自分で勉強し直すべきと考えてしまう。しかし、解剖学の成書の多くは図が多くあるものの、解説の少ないものが多い。また、セラピスト向けの解剖学書と言われると、全体を薄くして、簡素にした感じのものが目につく。そんな解剖学書をみているだけではなかなか理解しきれない基礎的な部分から話をしているのが著者の主宰する講習会『いまさら聞けない解剖学』なのだろう。

本書はセラピストにとっては、学生時代に習ったはずであろう解剖学の知識を再確認するには最良と思われる。本書を手にとり、必要な論文を読むことで、専門誌としての論文の新しさに気がつくかもしれない。また、養成校の学生にとっては、現場に出た後、理学療法士としてスタートを切るうえで、最低限身につけておくべきことが記されている。最低限というには少々分厚いかもしれない。しかし、日進月歩で進む医療に身を投じるものとしては、常に最新の情報に目を向ける必要がある。そのうえで本書には変わらないスタンダードが記されているという点から考えても最低限身につけておくことと認

識して、隅から隅まで熟読してほしい。

正直に言えば、解剖学をどんなに学んだとしても、患者は救われないし、救えない。セラピストである以上、患者を救う最短距離を走りたいと思うであろう。しかし、理学療法は魔法ではなく、科学である。科学としての理学療法に踏み入れるには、基礎としての解剖学が必要になる。理学療法の基盤を強くする一冊として、卒前・卒後の教育に手にとってもらいたい。



B5判・399頁・フルカラー
定価：本体5,600円＋税
羊土社刊，2018年